

低文体における共通語化の現象

—「早(はや)っ!」「っすよ」「いまいち」「めっちゃ」の普及—

尾崎喜光

1. 「共通語」と言いにくい全国的に用いられている表現

新しい言葉が生まれそれが普及することはよくある。

これまでなかった事象や概念が社会に新たに生じると、それを表わす言葉も新たに生まれ普及する。

最近で言えば「新型コロナウイルス」やその省略形の「新型コロナ」「コロナ」、あるいはこのうちの「コロナ」を複合語にした「コロナ禍」「コロナ疎開」「ウィズコロナ」などが該当する。言葉の上で「新型コロナウイルス」と派生関係等でない「ソーシャルディスタンス」のような関連語まで含めれば、今年は相当多くの言葉が生まれた。これらは新聞やテレビニュース等でも用いられ(というよりもそうした媒体を通して広まったのであるが)、今では共通語の一部となっている。

一方、事象や概念は以前から存在しておりそれを表わす言葉も存在し続けているにもかかわらず、その言葉に加え新たな言葉が生まれ普及することもある。公共のメディアでも使われる共通語に追加するわけであるから、それが用いられるのは公共性の低い私的な領域が中心となる。文体としては、改まりや丁寧さ、丁寧さを含む高文体というよりも、それらを伴わない低文体においてが主となる。さまざまな語があるが、本稿で取り上げる「早(はや)っ!」「っすよ」「いまいち」「めっちゃ」も、そうした語や表現の代表的なものである。

これらは現在いずれも全国的に用いられており、この点から言えば「共通語」ということになるが、これらを「共通語」と呼ぶことに抵抗を感じる人は少なくないと思われる。「共通語」を文字どおり「全国で共通に使われている言葉」と解すればそのような感覚はないはずであるが、実際には「文体的に低くない言葉」といった、ある種の規範性が暗黙の了解となっているためと考えられる。(『日本語大事典』の「共通語」の項参照；執筆担当＝筆者)

そのためこうした語は、高文体である度合いが極めて高い学術論文においては、指示対象として言及することはあっても(本稿でもそうしているが)、説明のための語として用いることはまずできない。

たとえば論文で「非常に普及している」とは言えても「めっちゃ普及している」とは言えない。「いまひとつ及ばなかった」とは言えても「いまいち及ばなかった」とは言えない。テレビニュースでも同様に、現場リポーターが濁流の速さを見て「早い!」とは言えても「早(はや)っ!」とは言えないし、取材対象者に対し「大変ですね」とは言えても「大変っすね」とは言えない。

こうした「共通語」とは言いにくい表現も、全国的に使われているという点からす

れば日本語の重要な一部である。

そこで本稿ではこうした表現を取り上げ、共通語の基盤となっている東京都において現在使用者率がどのようであるのか等について、多人数調査の結果から論じる。

2. 調査概要

本稿で示す東京都在住者の調査データは、次の方法により得たものである。筆者が研究代表をつとめる科学研究費補助金による共同研究の一環として実施した調査であるが^(注1)、本稿で論じる項目はいずれも筆者の提案によるものである。

- (1) 調査地域：東京都全域
- (2) 調査対象：20歳～69歳の男女個人
- (3) 抽出方法：エリアサンプリングによる無作為抽出法
- (4) 回答者数：1,049人（地点数は100地点）
- (5) 調査方法：相見積りにより選定した調査会社の調査員による訪問面接法
- (6) 調査期間：2018年10月～2019年3月

3. 分析

3.1. 「早（はや）っ！」

とても早くて驚いたとき、かつては「早い！」と形容詞終止形で言っていたところを、最近では活用語尾「い」を省略して語幹のみで「早（はや）っ！」と言う人が増えてきた。他の形容詞についても同様で、「長（なが）っ！」とか「弱（よわ）っ！」のように言う。文として用いることも可能で、たとえば「脚長（なが）っ！」のように言う。「長い！」の方も「脚長い！」と言えるが、格助詞「が」を含む「脚が長い！」という整った文でも言える。特に「脚が長～い！」のように誇張の強調を伴う発話では「が」を含むことの自然さが増すように感じられる。これに対し「長（なが）っ！」は、文体的に低い表現であるためか、格助詞「が」を含む「脚が長（なが）っ！」という整った文での許容度は小さいように感じられる。なお、「寒（さむ）～！」のように促音を伴わずに伸ばす発話も可能である。

こうした言い方が可能なのは、形容詞の中でも主として古典文法のク活用であり、シク活用の形容詞について活用語尾「い」を省略して「激しっ！」とか「懐かしっ！」と言う人はそれほど多くないように感じられる。「激しい！」や「懐かしい！」との音声上の違いがほとんどないことなどが影響している可能性が考えられる。

本研究ではク活用の形容詞「早い」で調査した。

3.1.1. 設問

質問文と選択肢は次のとおりである。質問文の「このように」とは、回答者の手元に置いてもらった「回答票」に選択肢とともに大きな字で印字されている「はや！」という言葉である（「っ」を含まない表現で提示した）。調査員による「はや！」の不自然な発音や発音の不統一を回避するためこのように文字により提示した。

Q2. 次に、言い回しなどについてお聞きします。

(1) とても早くて驚いたとき、このように言うことがありますか。

(ア) 言うことがある

(イ) 言わない

3. 1. 2. 結果と考察

結果は図 1-1 のとおりであった。

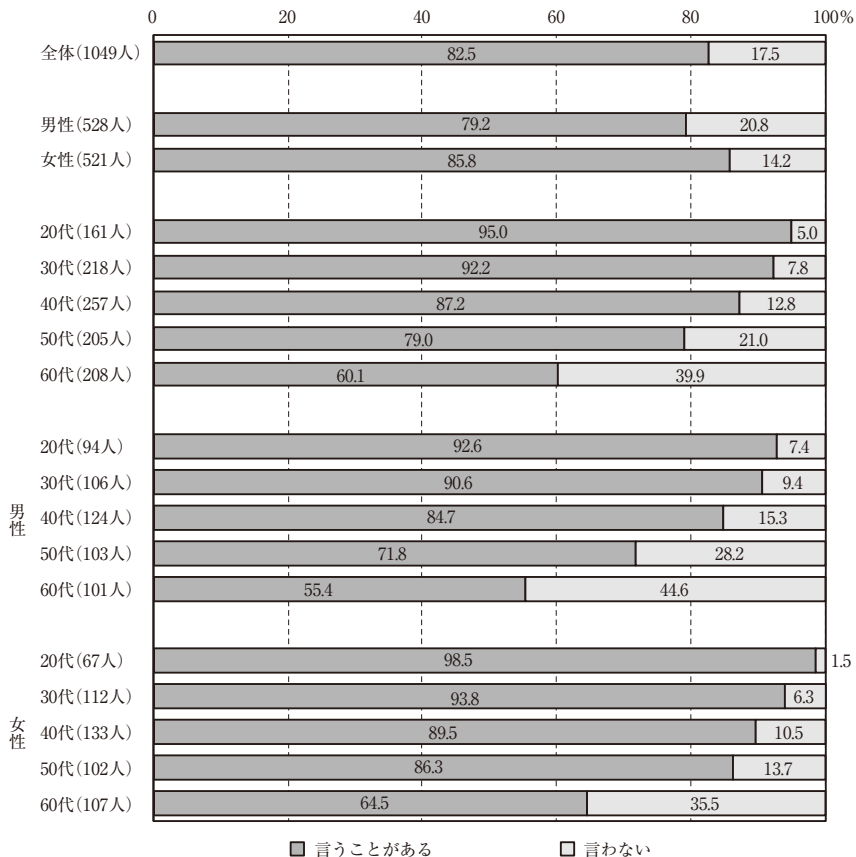


図 1-1 「早(はや)っ!」の使用

「早(はや)っ!」を「言うことがある」と回答した人の割合、すなわちこの表現の使用者率は全体でおよそ8割であることがわかる。どのような形容詞かにもよろうが、おそらくかつては西日本を中心に使われていたと考えられるこうした表現は、東

京都においても使う人が非常に多く、かなり一般化していることがわかる。

文化庁文化語国語課が平成 23 年（2011 年）2 月～3 月に全国の 16 歳以上の男女 2,104 人を調査した結果を報告した『平成 22 年度 国語に関する世論調査』によると、「寒っ。」を「自分も使う（又は、使うことがあると思う）し、他人が言うのも気にならない」と回答した人は 62.8% である。これに「自分は使う（又は、使うことがあると思う）が、他人が言うのは気になる」の 2.9% を加えると、当時の全国での使用者率はおよそ 65% である。地域ブロック別に見ると、「近畿」が平均よりかなり高い一方、「関東」は平均よりもやや低く、関西の表現が全国に広まったことをうかがわせる。あわせて調査した「すごっ。」「短っ。」「長っ。」「うるさっ。」の数値は「寒っ。」の二分の一程度にとどまっているため形容詞とひとくくりにはできない面もあるが、数値が高い「寒っ。」でも「関東」でおよそ 60% であったことを考えると、おそらくその後さらに普及していることが、今回の東京都での結果として表れている可能性が考えられる。

男女別に見ると、使用者率は女性で多少高いものの顕著な差というほどではなく、性別にかかわらず使用者率は高い。

年齢層別に見ると、60 代ですでに使用者率は半数を超えているが、若年層になるに従い数値は一貫して上昇し、最も若い 20 代の使用者率は 95% に達する。ほぼ全員が使っていると言ってよい数値である。この上昇傾向は、この表現が現在も普及しつつあることを示しているものと考えられる。ただし、たとえば 10 年前には使っていなかった個人がその後使い始めるということもおおいに考えられる表現であることから、全年齢層における底上げ的な変化（たとえばベースアップ）も含んだ状況でもあり考えられる。

回答者を男女に分けた上で年齢層別に見ても、先ほどと同様の傾向が認められる。特に 20 代女性の数値の高さは著しく、この表現を使わない人はほとんどいないと言ってよい状況である。

男女を年齢層別に比較しやすいよう組み替えて示したのが図 1-2 である。

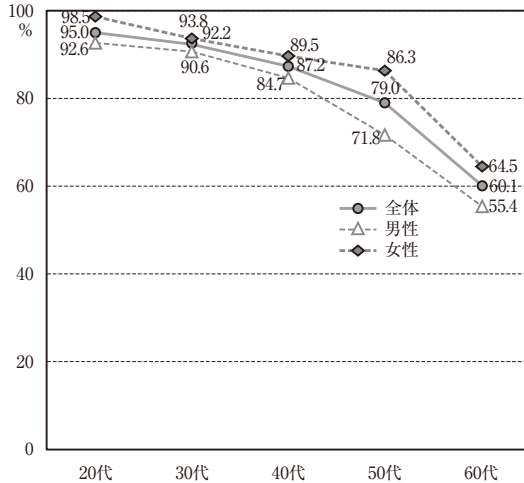


図 1-2 「早（はや）っ！」の使用者率

使用者率が相対的に低い 60代・50代では男女差がやや大きく、どちらかというとな女性が使う表現となっている。

使用者率がさらに高まるその下の年齢層では、全体の数値が 90% 前後と非常に高くなることもあって男女差は解消され、男女共通に使う表現である度合いが一層強まる。

東京都において「早（はや）っ！」は現在かなり普及しており、いずれは誰もが使うことのある低文体の共通語的表現として完全に定着するものと考えられる。

3.2. 「っすよ」(1) —形容詞への接続—

かつては「いいですよ」と言っていたところを、丁寧語「です」の「で」を弱化させて「いいっすよ」と言う人が最近増えてきた。「いい」のような形容詞のみならず名詞に接続させる場合もある。たとえば「東京ですよ」を「東京っすよ」のように「っす」を使う。弱化した「っ」をさらに弱化させ、ほとんど「いいすよ」「東京すよ」のように言うこともある。

さらに、「です」ではなく「ます」が接続する動詞にも接続し、「(おれ) 行くっすよ」のように言うこともある。

こうした表現に注目して自然談話における出現状況を分析した尾崎喜光(2002)は、「(っ)す」は丁寧語「です」が縮約されて生じたものとするとともに、形容詞や名詞だけでなく動詞の終止形に直接接続する点は興味深いとする。従来の丁寧語が縮約されたのであれば「行きますよ」は「行きっすよ」となるはずであるのに「行くっすよ」となるのは、形容詞や名詞に生じた形が、動詞終止形に直接接続したのであろうとする。そして、動詞にも「(っ)す」が用いられる結果、従来の「です」「ます」二系列

の丁寧語が「(っ)す」に一系列化される点も興味深いとする。さらに、成立の順序は、語の作りから考えると、おそらくまず名詞・形容詞において「す」が生まれ、その後動詞にも適用された可能性が高いとする。

本研究では、形容詞に接続する場合と動詞に接続する場合とを調査した。まずは形容詞に接続する場合を見てみよう。

3.2.1. 設問

質問文と選択肢は次のとおりである。ク活用の形容詞「よい」が口語化した「いい」により調査した。質問文の「このように」とは、「回答票」に選択肢とともに大きな字で印字された「いいっすよ」である。「です」ではない点に注目してもらうため、「っす」には下線を付した。なお、「早（はや）っ！」ほど馴染みのある表現ではないと推測されたことから、選択肢には「わからない」を追加した。

(2) 「いいですよ」ということを、このように言うことがありますか。

(ア) 言うことがある

(イ) 言わない

(ウ) わからない

3.2.2. 結果と考察

結果は図2-1のとおりであった。「わからない」を選択した回答者はほとんどおらず、回答は「言うことがある」か「言わない」がほとんどであった。懸念したような判断できないという状況はほとんどない表現であった。

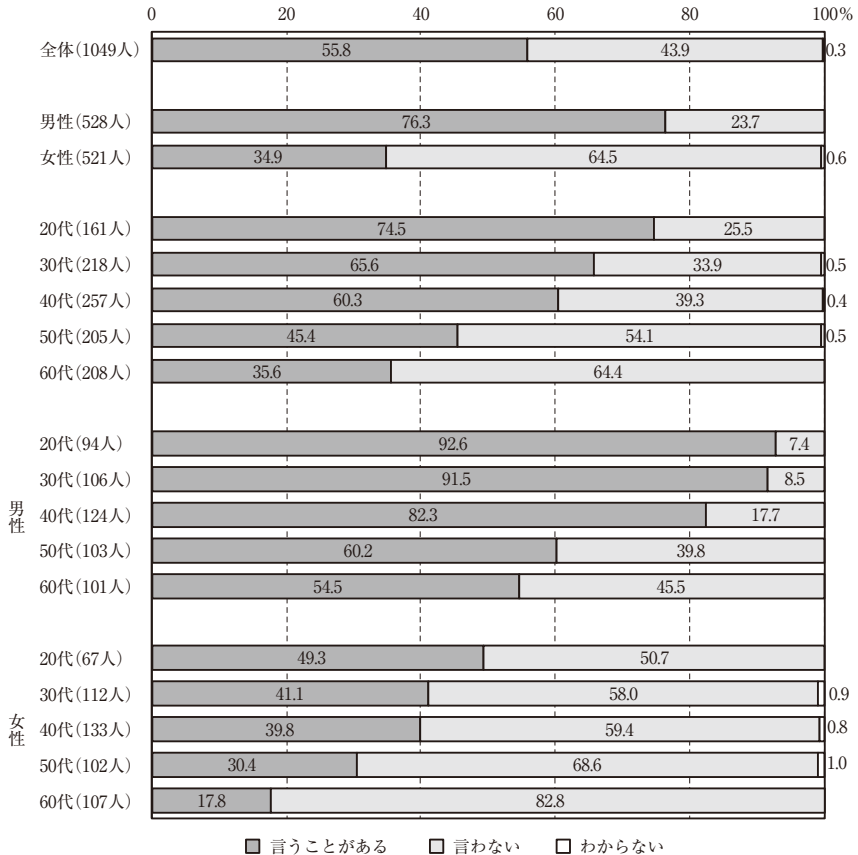


図 2-1 「いいっすよ」の使用

「いいっすよ」を「言うことがある」と回答した人の割合、すなわちこの表現の使用率は全体では5割超であることがわかる。どのような形容詞を提示するかによるだろうが、形容詞「いい」の場合、東京都においてこの表現を使う人はおよそ半数であることがわかる。現在は普及のただ中といった状況である。

男女別に見ると違いが顕著である。男性の使用率は8割近くあり、非常に多くの人が使っているのに対し、女性はそのおよそ半数にとどまる。主として男性が用いる表現となっていることがわかる。「っす」は「です」を元とする形であるため丁寧語ではあるが、きちんと「です」と言わずに「っす」とするところにぞんざいさも同時に伴う。丁寧さとぞんざいさ、あるいは距離と近しさという、通常は同居しえない2つの要素を同時に含むのがこの表現である。親しい先輩などに言う場合が典型的であろう。こうしたぞんざいさがこの表現には含まれるため、一般に男性よりも丁寧な表

現を用いる女性の間では使いにくいと感じられるのであろう。

男女差という観点ではないが、こうした表現が持つ機能については、竹田晃子(2017)も同様のことを指摘する。2016年に首都圏の女子大学生を対象に、こうした表現の使用／不使用ならびに使用する場合の媒体や相手を尋ねた。その結果、使用者・不使用者はいずれも約20名であること、使用者の自由記述を分析したところ、「ッス」は中間的な改まりの雰囲気を出し、相手や自分の精神的負担を軽減しようとしている様子がわかるとし、相手を遠ざける機能を持つこれまでの敬語に、積極的に親近感を表現する機能を持たせた点で新しいとする。

年齢層別に見ると、50代以上では使用者率が半数に達しないが、若年層になるに従い数値は一貫して上昇し、20代では7割を超える。女性の使用者率が低いいため、最も若い20代であってもほとんどの人が使うという状況ではないが、かなり多くの人が使っている。こうした使用者率の上昇傾向は、現在東京都においてこの表現がまさに普及しつつあることを示していると考えられる。なお、この表現についても、以前は使っていなかった個人がその後使い始めるということもおおいに考えられる。全年齢層における底上げ的な変化も含む状況でもあると考えられる。

こうした若年層に向けての使用者率の上昇傾向は、回答者を男女に分けた上で年齢層別に見た場合も認められる。特に20～30代男性の数値が高く、およそ9割が使っている。

男女を年齢層別に比較しやすいよう組み替えて示したのが図2-2である。

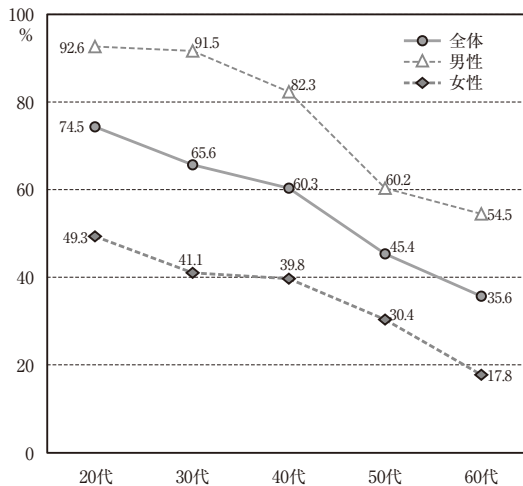


図2-2 「いっすよ」の使用者率

女性よりも男性で使用者率が高いという傾向は、いずれの年齢層においても認められる安定した傾向である。使用者率が高い20代でも、男性が約9割であるのに対し女性は約5割であり、4割もの開きがある。

東京都における「いっすよ」は現在普及のただ中にあり、定着するまでにはまだかなりの時間を要すると思われるが、丁寧体と非丁寧体（タメ語）の中間的な距離感が表せる便利な表現として、いずれは誰もが使うことのある低文体の共通語的表現として定着する可能性が考えられる。

3.3. 「っすよ」(2) 一動詞への接続—

次に、動詞に接続する場合を見てみよう。

3.3.1. 設問

質問文と選択肢は次のとおりである。動詞「行く」により調査した。質問文の「このように」とは、「回答票」に選択肢とともに大きな字で印字された「行くっすよ」である。「ます」でも「です」でもない点に注目してもらうため、「っす」には下線を付した。

- (3) では、「行きますよ」ということを、このように言うことがありますか。
- (ア) 言うことがある
 - (イ) 言わない
 - (ウ) わからない

3.3.2. 結果と考察

結果は図 3-1 のとおりであった。これについても「わからない」を選択した回答者はほとんどいなかった。

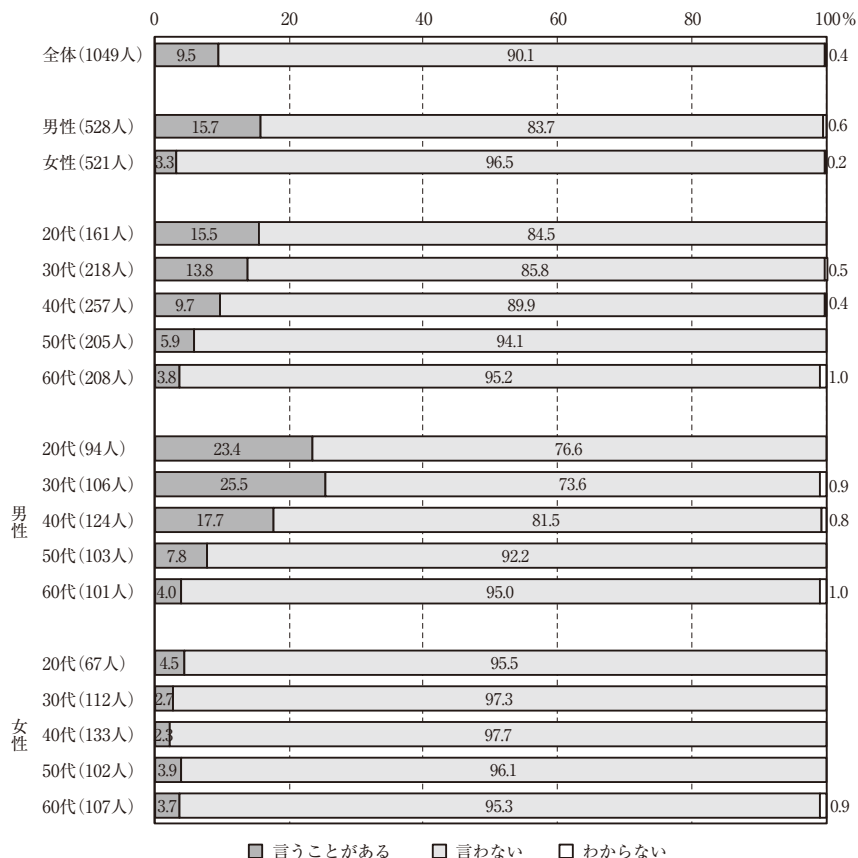


図 3-1 「行くっすよ」の使用

「行くっすよ」を「言うことがある」と回答した人の割合、すなわちこの表現の使用率率は極めて低く、全体で1割にとどまる。こうした表現が確かに使われているということ自体は本調査から確認されるが、使用者率という点から見れば、一般的な使用にはまだほとんど至っていない。通常は「ます」を伴う動詞に、「です」由来する「っす」を伴わせる不自然さや強引さが、数値が低い大きな要因となっているものと考えられる。

一五 男女別に見ると、ともに数値が低い中ではあるが顕著な違いがある。男性の使用率は2割弱ほどあり、使っている人も一定数はいるのに対し、女性の使用率はわずか数%にとどまる。低い数値の中ではあるが、「行くっすよ」を使うとすれば、ほとんどは男性であることがわかる。

年齢層別に見ると、やはり低い数値の中ではあるが、若年層になるに従い数値は一

貫して上昇する。もっとも、20代であっても使用者率は2割に達しない状況である。最近普及が始まったばかりという状況であり、今後の動向が注目される。

回答者を男女に分けた場合、若年層に向けての使用者率の上昇傾向は男性において認められる。使用者率は40代前後で加速し、20～30代では2割を超える。一方女性は、若年層においても使用者率はほとんど上昇しない。数値のみならずこうした傾向においても、男女の違いが認められる。

男女を年齢層別に比較しやすいよう組み替えて示したのが図3-2である。

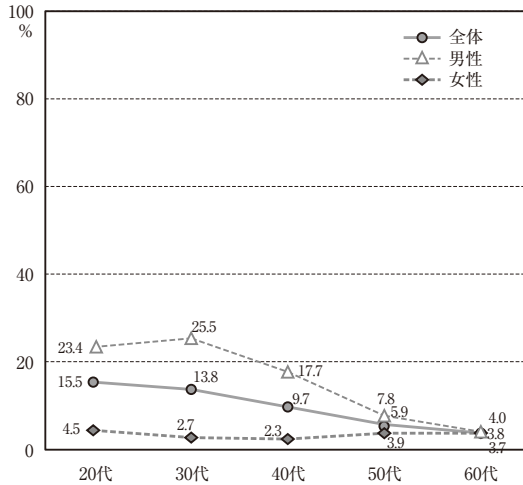


図3-2 「行くっすよ」の使用者率

若年層に向けて数値が微増傾向にある男性と、そうした傾向すら見られず数値が低いままの女性という違いが見られる。その結果、男女の開きは若年層になるに従い大きくなる。

東京都における「行くっすよ」は、その異例な語構成ゆえ、現在のところ、若年層男性を中心にある程度普及しているにとどまる。一般化するとしたらまだ相当先のこととなろうが、今後の動向が注目される。

3.4. 「いまいち」

十分さが不足しているさまを、かつては「いま一つよくない」のように「いま一つ」と言っていたが、最近は「一つ」の部分を「いち」と音読みして「いまいち」と言う人が増えてきた。典型的には友達同士の会話など、低文体の話し言葉を中心に用いられており、正式な文章で用いられることはまずない。こうした表現を自分のレパートリーとして持っているか否かを調査した。

3.4.1. 設問

質問文と選択肢は次のとおりである。質問文の「このように」とは、「回答票」に
 選択肢とともに大きな字で印字されている「いまいちだ」である。

(4) 「いまひとつよくない」ということを、このように言うことがありますか。
 (ア) 言うことがある
 (イ) 言わない
 (ウ) わからない

3.4.2. 結果と考察

結果は図4-1のとおりであった。これについても「わからない」を選択した回答者はほとんどいなかった。

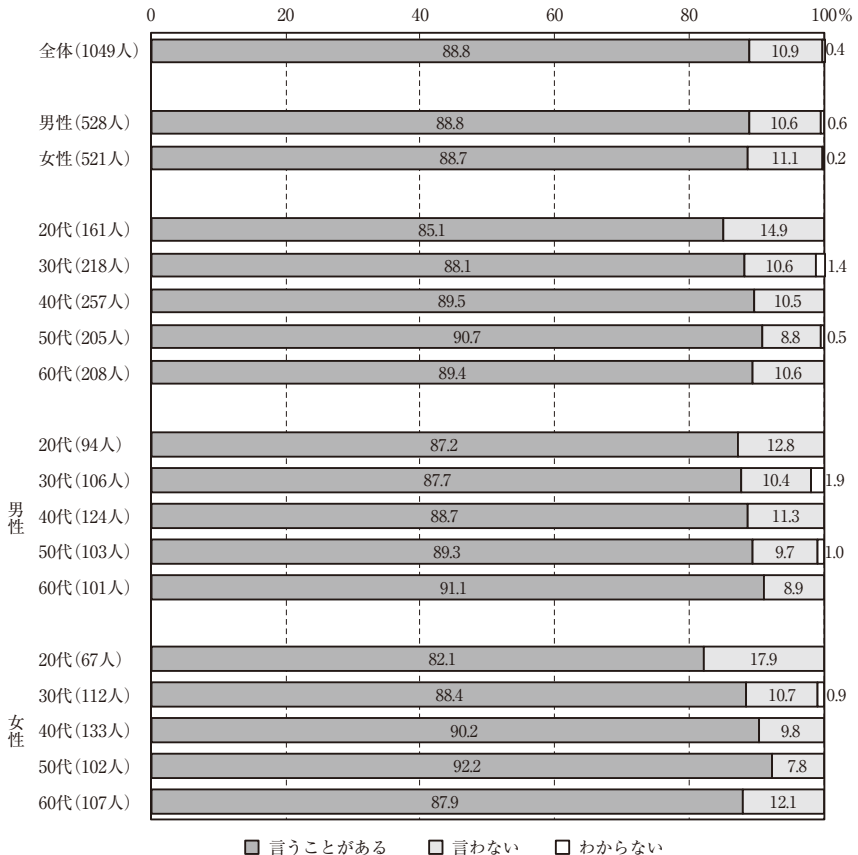


図4-1 「いまいち(だ)」の使用

「いまいち」を「言うことがある」と回答した人の割合、すなわちこの表現の使用率は極めて高くおよそ9割である。使える場面や使える相手にはおそらく制約があるだろうが、この表現をレパトリーとして持っており、状況によっては使っている人が現在ではほとんどであることがわかる。低文体での共通語としてほぼ定着したとってよい状況である。

男女別に見ると、男性も女性も使用者率は9割にのぼり、この表現の使用について男女差はない。

年齢層別に見ても顕著な違いはなく、高年齢層から若年齢層まで非常に多くの人が用いており、どの年齢層でも定着の度合いは高い。ただし、30代から20代にかけてはわずかながら数値の減少が見られる。特に女性においてはその傾向が著しく、減少幅は1割近くある。低文体での普通の表現として使われ続ける中で古めかしさが感じられるようになり衰退が始まっている等のことも考えられる。今後の動向が注目される。

男女を年齢層別に比較しやすいよう組み替えて示したのが図4-2である。

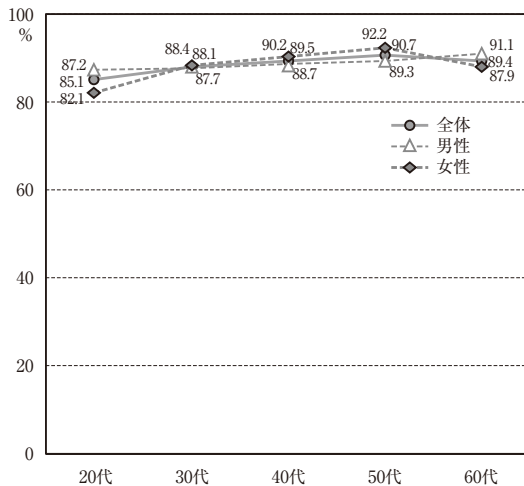


図4-2 「いまいち (だ)」の使用率

男女とも使用者率が極めて高く、そのためどの年齢層においても男女差はほとんど見られないことが改めて確認される。ただし20代においては、先に指摘したような女性における数値の低下が見られることから、男女の開きが5%となり、他の年齢層と比べると男女差がいくぶん生じる。若年齢層の女性の間で数値が今後どう動くかと同時に、男女差の広がり方がどう変わるかという点も注目される。

東京都において「いまいち」はほぼ定着しており、誰もが使うことのある低文体の共通語的表現となっている。

3.5. 「めっちゃ」等の程度副詞

程度がはなはだしいさまを表す程度副詞は全国でじつにさまざまな表現がある。たとえば北海道では「なまら」やそのバリエーションである「なんま」が使われているし、岡山県では「ぼっけー」「でーれー」等が使われている。このうちももとは関西を中心に使われていたと思われる「めっちゃ」は、現在では全国的な広まりを急速に見せているようである。北海道各地での使用者率は「なまら」や「なんま」をしのぐ（朝日祥之・尾崎喜光 2017）。岡山市や福山市でも同様の傾向が見られる（尾崎喜光 2021）。

このほか「とても」や、「めっちゃ」の非強調形の繰り返しの「めちやめちや、これらの元の形である「めちやくちや、そのバリエーションである「むちやくちや、その省略形の「むっちゃ」なども全国的にある程度用いられているようである。

さらに、話し言葉としては典型的な共通語の「すごく」も全国的に用いられているが、連用形の「すごく（疲れた）」ではなく終止形・連体形の「すごい（疲れた）」とする異例な表現、さらにはその連母音 [oi] を融合して [e:] とする「すげー（疲れた）」も低文体でよく聞かれる。現在では若干古めかしさも感じられそうな「ちょー」も使われている。

これら以外にもさまざまな表現がありそうであるが、本調査では上記の表現（ただし「めちやめちや」を除く）の使用者率が現在の東京都でどうであるのかを調査した。

3.5.1. 設問

質問文と選択肢は次のとおりである。「(M. A.)」は「複数回答可」の意味である。

(5) 「とても疲れた」の「とても」は、ふだん何と言っていますか。自分で言うことがあるものをすべて選んでください。たくさん並んでいますが、上から一つずつ確認してってください。(M. A.)

(ア) すごく (すっごく・すんごく) 疲れた

(イ) すごい (すっごい・すんごい) 疲れた

(ウ) すげー (すっげー・すんげー) 疲れた

(エ) めっちや疲れた

(オ) むっちや疲れた

(カ) めちやくちや疲れた

(キ) むちやくちや疲れた

(ク) ちょー疲れた

どれも言わない

程度副詞は「疲れた」にかかる表現とした。回答者が使う表現は一つとは限らないであろうことから、自分で使うことのある表現を全て選んでもらった。回答者が語形の小さな違いを見落さないよう、異なる重要な箇所には下線を付して注意喚起した。「すごく」等には促音や撥音を含む強調形もあるが、それらも含むものとして回答し

てもらえるよう（ ）を用いて補った。なお、「どれも言わない」は回答票にはなく、調査票にのみある。回答者がどれも選択しなかった場合は調査票の選択肢のどこにもチェックが付かないことになるが、そのままだと調査漏れである疑いが出てくる。そうではないことを積極的にマークするために、調査票にだけはこれを追加してチェックした。ただし該当者は1.3%に過ぎず、ほぼ全員が少なくともいずれか一つは選んだ。

3.5.2. 結果と考察

結果は図5-1のとおりであった。

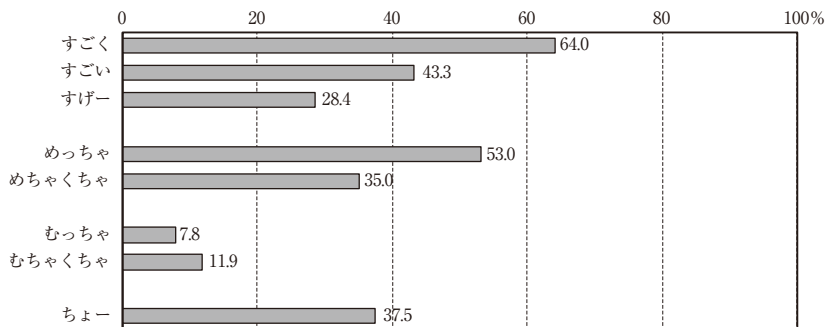


図5-1 <とても>の各種表現の使用者率（全体）

使用者率が最も高いのは、話し言葉では最も標準的な「すごく」である。6割超が用いている。もっとも、最も標準的な表現であるにもかかわらず使用者率は6割超にとどまるという見方もできる。程度副詞はバラエティに富むことから、「すごく」を使わない人も少なからずいるためであろう。

「すごく」を「すごい」とする異例な表現の使用者率は、現在の東京都でおよそ4割となっている。「すごい（速い）」の使用についても調査した文化庁文化部国語課の『平成23年度 国語に関する世論調査』（調査は2012年）によると、この表現を言うことがあると回答した人は「関東」で45%である。「全国」の数値は49%であるが、この8年前、15年前の調査から微増していることが示されている。これらのことから、東京都でも使用者率は以前から増加傾向にあり、現在における結果がこの数値となっているものと考えられる。

「すごい」の崩れた形である「すげー」の使用者率も一定数あり、およそ3割が用いている。

本調査で最も注目した「めっちゃ」は、現在ではおよそ5割が用いている。「すごく」を除けば最もよく使われる表現となっている。

その元の形である「めちゃくちゃ」も、「めっちゃ」ほどではないものの、およそ3人に1人が用いている。いずれも関西起源と考えられる表現であるが、現在では東京都においても主要な表現の一つとして定着しつつある。

一方、「むっちゃ」や「むちゃくちゃ」の使用者率は低い。東京都で言うのであれば「む」系ではなく「め」系である。

「ちょー」も約4割が用い、これも主要な表現の一つとなっている。

これらを属性別（男女別・年齢層別）に示したのが図5-2・図5-3である。表現が多いためグラフは2枚に分けて示した。

図5-2により「すごく」「すごい」「すげー」「ちょー」のおもな特徴を見てみよう。

男女別に見ると、最も標準的な「すごく」には男女差がほとんどないが、「すげー」は男女差が大きく、主として男性が用いる表現となっている。連母音の融合に感じられるぞんごいさが、こうした違いを生み出す要因となっていると考えられる。その裏返しと考えられるが、「すごい」はむしろ女性でやや優勢である。また、「ちょー」もどちらかと言うと女性で優勢である。

年齢層別に見ると、「すごく」は若年層になるに従い一貫して使用者率が減少する。ただし20代・30代においても優勢な表現の一つであることに変わりはない。その結果、これらの若年層では、さまざまな表現が同程度の使用者率で用いられる状況となっている。これに対し「すごい」「すげー」「ちょー」は、むしろ若年層になるに従い使用者率がほぼ一貫して上昇する。こうした表現が東京都においても広まりつつあることが、こうした年齢層の違いとして表れている面が少なくないと考えられる。ただし、40代以下ではこれらの表現の数値の伸びは鈍化し、頭打ちの傾向も見られる。誰もがふつうに使う低文体の共通語としての広まりにまでは至らない可能性がある。今後の動向が注目される。

男女に分けた上で年齢層別にしたグラフを見ると、先に述べた年齢層別の傾向は、基本的に男性にも女性にも該当することが確認される。数値的に特に注目されるのは、30代女性における「すごい」の使用者率の高さと、50代・60代女性の「すげー」の使用者率の低さ等である。

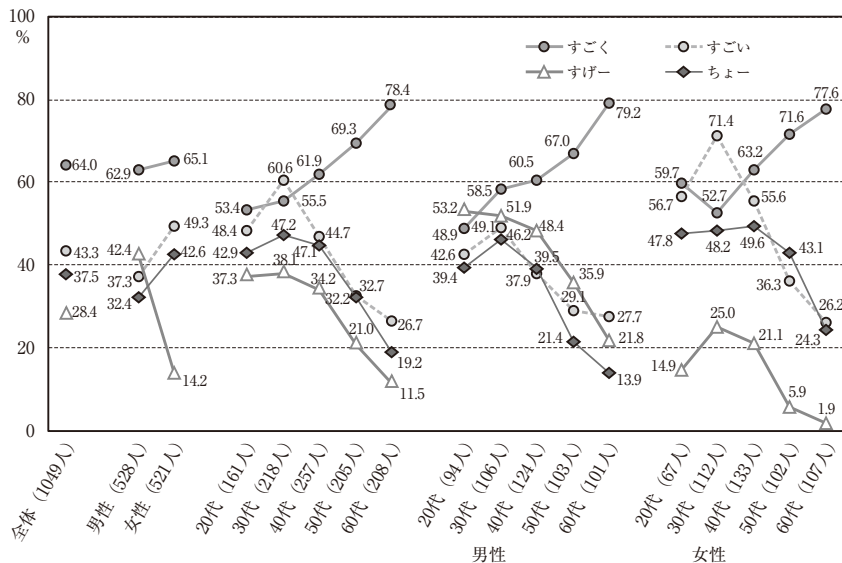


図 5-2 <とても>の各種表現の使用率率 (属性別①)

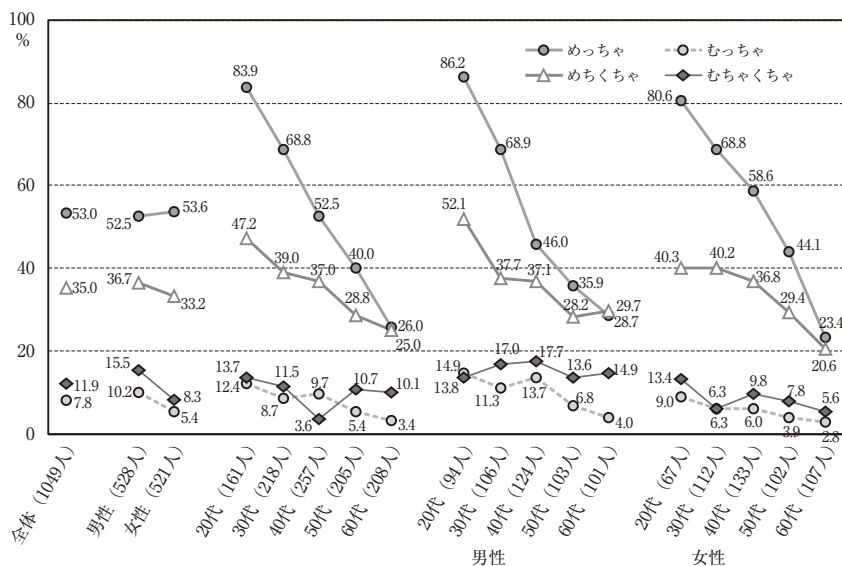


図 5-3 <とても>の各種表現の使用率率 (属性別②)

図 5-3 により「めっちゃ」「めちゃくちゃ」「むっちゃ」「むちゃくちゃ」のおもな

特徴を見てみよう。

男女別に見ると、これらの表現には顕著な男女差はないと言える。全体でおよそ5割が用いている「めっちゃ」は、男女ともにおよそ5割が用いている。

年齢層別に見ると、「めっちゃ」が若年層に向けて数値を大きく伸ばしている点が注目される。現在急速に普及していることがここに現われているものと考えられる。低文体の共通語として今後定着に向かう可能性が高い。東京都に見られるような「めっちゃ」の大きな年齢差は、先に述べたように北海道の各地や岡山市・福山市でも確認される。おそらく全国的な傾向であると推測される。「めっちゃ」の元となった「めちやくちゃ」にも、数値自体は「めっちゃ」よりも低いながら、同様の傾向が認められる。この「めちやくちゃ」は、60代では「めっちゃ」とほぼ同じ使用者率であるが、若年層になるに従い開きが大きくなり、若年層ほど「めっちゃ」の優勢性が強まる。これに対し「むっちゃ」や「むちやくちゃ」には、年齢層による顕著な違いは認められず、少なくとも現在のところ広まりは見られない。

男女に分けた上で年齢層別にしたグラフを見ると、先に述べた年齢層別の傾向は、基本的に男性においても女性においても該当することが確認される。数値的に特に注目されるのは、20代男性における「めっちゃ」の使用者率の高さである。9割近くが用いており、ほぼ定着したといってよい状況である。

4. まとめと今後の課題

本研究で得られたおもな知見をまとめると次のようになる。

①「早（はや）っ！」

東京都における「早（はや）っ！」の使用者率はおよそ8割であり、現在かなり一般化している。使用者率は男女ともに高い。

年齢層別に見ると、使用者率は若年層になるに従い一貫して上昇し、20代では95%に達する。とりわけ20代女性の数値は著しく高く、この表現を使わない人はほとんどいないと言ってよい状況である。

東京都において「早（はや）っ！」は現在かなり普及しており、いずれは誰もが使うことのある低文体の共通語的表現として完全に定着するものと考えられる。

②「っすよ」(1) —形容詞への接続—

「いいっすよ」の使用者率は5割超である。およそ半数が用いており、現在は普及のただ中にあるといった状況である。

男女別に見ると、男性の使用者率は8割近くあるのに対し、女性はそのおよそ半数にとどまる。丁寧さと同時にぞんざいさも含む表現であるため、主として男性が用いる表現となっている。

年齢層別に見ると、若年層になるに従い使用者率は一貫して上昇し、20代では7割を超える。とりわけ20～30代男性の数値は高く、およそ9割が用いている。

東京都において「いいっすよ」は現在普及のただ中にあるが、通常の敬語にはない

距離感（＝距離を保ちつつ接近もする）を表せることから、いずれは低文体の共通語的表現として定着するものと考えられる。

③ 「っすよ」(2) 一動詞への接続

一方、「行くっすよ」の使用者率は極めて低く1割にとどまる。一般的な使用にはほとんど至っていない。「です」に由来する「っす」を動詞に伴わせることの不自然さや強引さがその大きな要因となっているものと考えられる。

男女別に見ると、男性は使用者率が2割弱ほどあるのに対し、女性はわずか数%にとどまる。「行くっすよ」を使うとすれば、ほとんどは男性である。

年齢層別に見ると、若年層になるに従い数値は一貫して上昇する。ただし20代でも使用者率は2割に達しない。

回答者を男女に分けて年齢層別に見ると、若年層に向けての使用者率の上昇傾向は男性においてのみ見られる。こうした点にも男女差が認められる。

東京都において「行くっすよ」は、その異例な語構成ゆえ、現在のところ、若年層男性を中心にある程度用いられるにとどまる。一般化するとしたらまだ相当先のことであろう。

④ 「いまいち」

「いまいち」の使用者率は極めて高くおよそ9割である。低文体での共通語としてほぼ定着している。

男女とも使用者率は9割にのぼり、男女による違いはない。また、年齢層別に見ても、高年層から若年層まで非常に多くの人が用いており、どの年齢層においても定着の度合いは高い。ただし、女性においては、30代から20代に向けて使用者率の減少が見られる。今後の動向が注目される。

東京都において「いまいち」は、すでに誰もが使うことのある低文体の共通語的表現となっている。

⑤ 「めっちゃ」等の程度副詞

回答者に提示した表現のうち使用者率が最も高いのは「すごく」であり、6割超が用いている。「すごい」という異例な表現の使用者率はおよそ4割、その崩れた形である「すげー」の使用者率はおよそ3割である。

一方、「めっちゃ」の使用者率は5割、その元の形である「めちゃくちゃ」もおおよそ3人に1人が用いている。関西起源と考えられるこうした表現は、現在では東京都においても主要な表現として定着しつつある。もっとも「むっちゃ」や「むちゃくちゃ」の使用者率は低い。「ちょー」の使用者率もおよそ4割であり、東京都における主要な表現の一つとなっている。

男女別に見ると、「すげー」は主として男性が用いる表現となっている。連母音の融合に感じられるぞんざいさがその要因であろう。関西起源の「めっちゃ」「めちゃくちゃ」「むっちゃ」「むちゃくちゃ」には顕著な男女差はない。

年齢層別に見ると、「すごく」は若年層になるに従い使用者率が一貫して減少するのに対し、「すごい」「すごい」「ちよー」はむしろ上昇する。こうした表現が東京都において広まりつつあることが表れているものと考えられる。

関西起源の「めっちゃ」は、若年層に向けて数値を大きく伸ばしている。特に20代男性はおよそ9割が用いており、ほぼ定着したといってよい状況である。東京都において現在急速に普及しつつあるものと考えられる。今後低文体の共通語として定着に向かう可能性が高い。数値は低いが「めちゃくちゃ」にも同様の傾向が認められる。これに対し「むっちゃ」や「むちゃくちゃ」には広まりが見られない。

以上のような結果が得られた。

低文体で用いられるこうした表現は、おそらく全国的に普及しつつあるものと考えられる。今回は、共通語の基盤となっている東京都在住者を対象に調査したが、今後は東京都から大きく離れた地域や全国を対象とした研究に展開し、現在の日本の状況をトータルに数値的に把握する必要がある。

注1 本調査は、JSPS 科研費JP18H00673（研究課題「共通語の基盤としての東京語の動態に関する多人数経年調査」；研究代表者・尾崎喜光）による調査研究の一環として実施したものである。

参考文献

- 朝日祥之・尾崎喜光（2017）「北海道における方言使用の現状と実時間変化 その5」『北海道方言研究会会報』93
- 尾崎喜光（2002）「新しい丁寧語「っす」」現代日本語研究会編『男性のことば・職場編』ひつじ書房 *現代日本語研究会編（2011）『合本 女性のことば・男性のことば<職場編>』（ひつじ書房）として復刊
- （2021）「岡山市・福山市における“濃い”方言の使用に関する社会言語学的研究—「じゃが」「けん／けー」「ほっけー／でーれー」—」『ノートルダム清心女子大学紀要 日本語・日本文学編』45-1
- 佐藤武義・前田富祺編集代表（2014）『日本語大事典』（朝倉書店） *「共通語」の項
- 竹田晃子（2017）「コラム③ 市民権を得つつある「ッス」」井上史雄編『敬語は変わる—大規模調査からわかる百年の動き』大修館書店
- 文化庁文化庁国語課編（2011）『平成22年度 国語に関する世論調査 現代の国語をめぐる諸問題』ぎょうせい
- （2012）『平成23年度 国語に関する世論調査 日本人の言語生活』ぎょうせい
（おざき よしみつ／本学教授）

キーワード＝低文体、共通語、普及と定着、東京都、多人数調査